

来は御頭屋でばながたが、御頭屋の頭役を無事勤め終え、御頭屋の神のよりしろである御鉾本を受け、礼錢を納めて自分の郷村に帰り、御鉾本を祀って無事勤め終えたことを郷村内で領主を交えて祝う。その御鉾本を安置する場所が御頭屋なのである。そこで御桐谷が御頭屋であるという推定に立てば、現望月町の城光院から役場のあたりにかけての一带が頭役を勤めたという証明にもなる。

「古い居館はどこか」の項で、用水や文化財の残存などを通して、本村下之城の城の館跡が古く、望月町に向堰や城光院のあるあたりの鹿曲谷上流部の方が新しいということ述べておいたが、このことと同様に、望月氏には神氏となった時代があり、その古い時代の所領とみられる大字下之城部分には頭役がなく、新しく南北朝から室町時代にかけての開発とみられる上流部には頭役があるという右のことからも開発の新旧が証明されているようにみえる。

『御符礼之古書』の望月の頭役が花会のみであったという点も、これで理解できる。花会は鎌倉時代にはなく、望月氏が鹿曲谷上流部を開発して頭役を勤めようとしたところに、花会の頭役が成立していたからである。

四 両羽神社と経簡

1 両羽神社

北御牧村下之城の両羽神社の歴史について、いい伝えられているこ

祭神は天照大御神、天児屋根命、天太玉命の三神が祀られている。年代はつまびらかではないが、古昔、東の山上、原野の地に社を建て原宮とか芝宮とか八葉山大明神と称し、産土神であった。望月氏の所領になってから御牧七郷の惣社とし、大宮大明神と改称した。望月氏の祖廟八葉明神が慶長年中火災に遭い両羽神社に移した。以上が、大正五年（一九一六）三月記の「両羽神社祭神御事歴由緒」の要旨である。これだと、宮の集落にある両羽神社は、いつからここにあったのかはつきりしない。『長野県町村誌』では、最初から現在の地に建てられていたとする書きぶり、原宮と称したのは、この社に属する土地が原にあったから、八葉山という名は山上を富士山の峰にたとえて仏門の人がつけた名であるという。八葉とは蓮華のことである。正慶二年の石龜も、これから述べる文安の経簡も、いずれも宮集落の現社地から出ているのだから、当初からこの地に建立されていたとみる方が妥当であろう。ただ、この説に立つと原宮が火災に遭って現両羽神社に併せ祀られたとする伝承は、そのままでは宙に浮いてしまう。

天照大神が天の岩戸にかくれたとき、天太玉命が御幣を持ち、天児屋根命が祝詞を奏したとする神話に係る三柱の祭神が、なぜ鹿曲谷の宮に祀られることになったのだろうか。

京都と大津の間に山科盆地があるが、この東海道線山科駅の東北方、山科区四ノ宮町中在寺町に諸羽神社がある。祭神は北御牧と同じく天児屋根命と天太玉命である。貞観年間（八五九〜七七）の創立

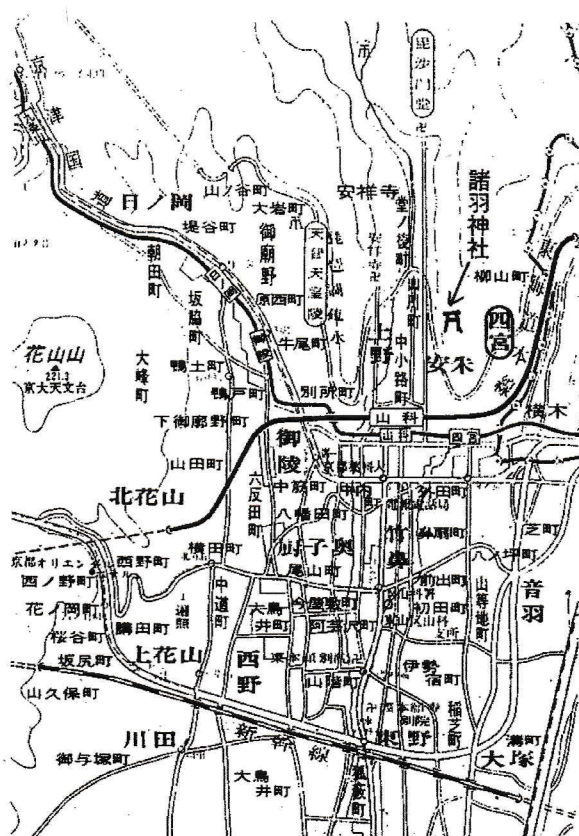
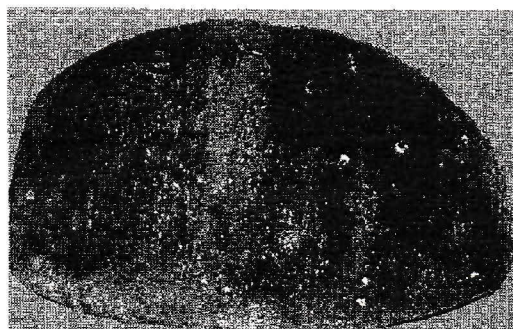


図27 京都山科の諸羽神社

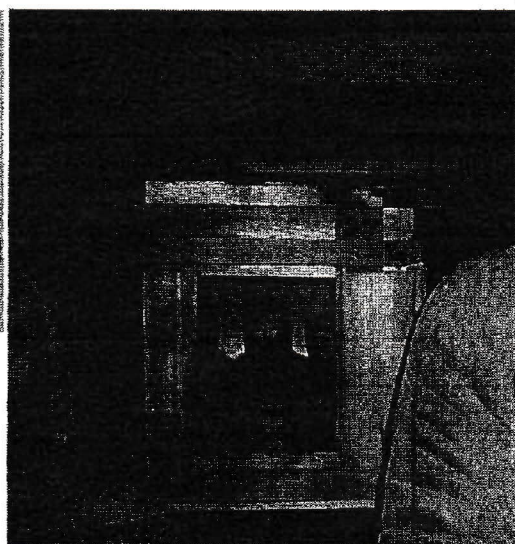
と伝え、この宮がもとでこの付近一帯を四ノ宮と呼ぶようになったのである。ここ四ノ宮の地は、古代から東海道・東山道・北陸からの道が合わさって都に入る重要な所であり、逢坂の関は、すぐこの東である。諸羽神社も昔は諸羽大明神と呼ばれ、古くは両羽の字が用いられていた。両羽の意味は、『雍州府志』に、天照大神をたすけた両翼の神であるからとある。望月牧の駒も、また駒牽く人も、必ずこの両羽神社の前を行きつ帰りつしたのである。

ここまでみてくると、史料に書き記されているわけではないが、北御牧の両羽神社は望月牧の時代、ここから勧請、分祀されたものと考えることができる。

当社本殿内の最上段に、三体の神像が祀られている。一体が男像、



写24 神像墨書



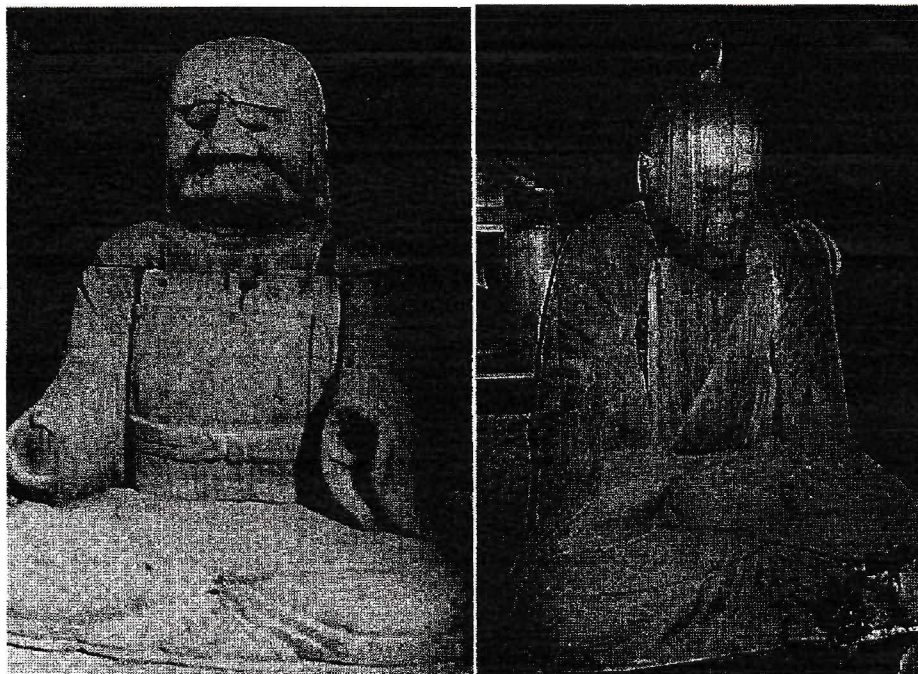
写23 最上段の三神像

われる。この永享三年（一四三二）が、神像製作の年かもしれない。

次の段には、次ページ写真のような大きな木造座像がある。向かって右は古くは善淵王と伝えられていたが、後、改められて貞保親王

二体は女像である。これが三柱の祭神を神像化したものであろうことは、容易に想像がつく。その女神のうちの一体の底部に、写真にかかげたような墨書文字が見いだされる。磨滅して判読できないが、あえて読むと「永享三年 五月四日」と読める。文字は異体字が多く、永は「永」、享は「享」、年は「年」か

「季」の字が使われているように思われる。



写25 船代像（左）と貞保親王（右）（両羽神社）

像、左側は船代像であるといひ伝えられている。寄木造で、比較的粗い造りである。製作の年代も不明であり、「両羽神社祭神御事歴由緒」では、祭神ではないと記している。善淵・貞保・船代いずれにしても、望月氏の祖先と考えられていた人の像である。

2 文安の経筒

本村下之城の両羽神社境内に六合神社ろくごうが並置されているが、昭和三十年（一九五五）、このお宮を建てる工事の際に経筒が出土した。高さ一八センチの青銅製で円柱状の経筒である。この周囲に十一行にわたって線刻の文字がある。

奉如法書写

妙法蓮華經 一部

文安二年八月廿九日

願主 幸寛

正信女

施主 道慶

大工 海阿

宥海 澄祐 重仙 弘海

雄算 順海 亮慶 雄信

光秀 伏蒼 良伏 秀算

幸祐 幸秀 秀

「如法書写 妙法蓮華經」とは、一定の規則にしたがって法華經一部を書き写して、経筒の中に納めることである。文安二年（一四四五）のこのころ、一般には廻国埋納の関係から経筒が高さ一〇センチ前後と小型化するのにくらべて、これは一八センチと鎌倉時代のものに似たタイプである。このことは目的が追善供養にあつた色彩が強い。幸寛・正信が願主で、施主がおり、宥海以下一四人の賛同者がいること